



江南小だより

八戸市立江南小学校 学校だより
令和6年2月29日発行
通算第555号

子どもの人生の主演は子ども

校長 笹川 力

令和5年度も残すところあと1か月。子どもたちと毎日接していると気付きにくいのですが、改めて約1年前の子どもたちの姿を思い浮かべると、心も身体も大きく成長したことに気づかされます。また、勉強も運動もできることが確実に多くなっているはず。小学生の成長の速さを実感するとともに、その責任の大きさを痛感します。

さて、今年度11月号（552号）のおたよりで次のように書きました。

最近、子どもの判断にゆだねる親が多くなってきているように感じます。もちろん、自主性・主体性を育てることは大切です。しかし、物事を判断するとき、らかな方、たのしい方に流されるのが子どもです。やはり、親が長い目で見て正しい方向へ導いてやるべきなのだと思います。

あとで読み返してみても、どうも言葉足らずな印象がぬぐえないので、この点について少し補足説明をさせていただきます。

- 1 心配しているのは「子どもの判断≒わがままの容認」という部分であって、子ども自身が主体的に考えることを否定しているものではありません。
- 2 放任主義もある程度は必要なことで、むしろ過干渉のほうを心配してます。

それでは、過干渉とはどういった関わり方のことを指すのでしょうか。

まず、過干渉と似た言葉「過保護」という言葉がありますが、これを整理する必要があります。この二つの言葉は明確に区別されていて、次のように考えると分かりやすいと思います。

過保護：子どもが求めることをやり過ぎること

過干渉：子どもが求めないことまでやり過ぎること

ある児童精神科医は「過保護は自立の芽を育て、過干渉は自立の芽を摘む」と言っています。その医師は「育児の基本は、子どもの気持ちをよく聞いてやること」とも言っています。つまり、過保護と過干渉の大きな違いは、子どもをちゃんと見ているか、子どもの声に耳を傾けているかの違いなのだと思います。まず、やめるべきは過干渉。大人が動くのは一番最後。雨が降って傘を持ってなければ濡ればいいし、友達に悪口を言われたのならその愚痴を黙って聞いてやればいいのです。様々な経験をすることで子どもは成長しますし、思ったよりも子どもってたくましいものです。

また、これを放任に当てはめても同じようなことが言えるのではないのでしょうか。子どもの自主的な判断に任せるにしても、きちんと子どもを見て、本当の気持ちを聞いてあげた上でその判断を尊重するのか、そうでないのか。

「子どもの人生の主演は子ども」です。子どもの「やりたい」を応援しながら、もし子どもが間違っただけのことをしたら、きちんと「それは違うよ」と言ってあげられる大人になりたいものです。

